

実現するとともに、自立と社会参加を促進するためには、福祉の場における新たな環境づくりも必要である。

#### **i)福祉の場における芸術創造活動の実態調査**

障害者の芸術創造活動の普及啓発の促進や「障害者アート」の作品収集等のためにも、福祉施設等における芸術創造活動の実態などを把握することが必要である。

#### **ii)障害者の芸術創造活動の環境づくり**

障害者の芸術創造活動は、余暇活動やリハビリだけのものではなく、障害者の個性や才能を生かした自己表現であることから、より積極的に活動を推進できるよう、学芸員との連携などによる福祉施設等における指導員の養成や資質向上が必要である。また、障害者の作品等の魅力を広く国民に知ってもらうため、福祉の場における芸術創造活動の事例集を作るなど、広報啓発を進めることも必要である。

#### **iii)障害者の芸術創造活動の成果を活用した就労形態などの検討**

障害者の自立(経済的な自立)につながるよう、芸術創造活動を通じて、その才能や個性、センスを生かした、新たな就労形態が可能とできないか、仕組みづくりや市場開拓などについての検討も必要である。

### **(4)その他考えられるもの**

#### **i)公募展に対する後援や顕彰**

これまでに述べたもののほかにも、国としては、例えば民間団体が「障害者アート」を取り上げた公募展をするとき文化庁や厚生労働省が後援したり、優秀作品に文部科学大臣賞・厚生労働大臣賞を交付したりすることもあり得る。現在でも多くの美術団体が公募展を実施し、評価の確立しているものについて後援、また大臣賞授与がなされているところであり、内容や事業規模などについて一定の基準を満たしており、質の高いものであれば「障害者アート」の展覧会にも同様の対応ができる。「障害者アート」の振興に多大な貢献をした個人や団体に対しては、文化庁や厚生労働省として顕彰を行うことも考えられる。顕彰や表彰は、それを受ける人や団体の業績を讃えるとともに、その分野での更なる活躍を期するものである。これにより、「障害者アート」に対する社会的な関心がより高まると見込まれる。

#### **ii)障害者の芸術鑑賞機会の拡充(「ユニバーサル・ミュージアム」の推進)**

公立博物館における障害者の受け入れに関しては、「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成15年6月6日文部科学省告示)において、青少年、高齢者、障害者、乳幼児の保護者、外国人等の博物館が実施する事業への参加促進や博物館の利用促進に関して努力義務規定がおかれているが、今後、同基準がより細やかな規定となることを期待したい。また、文部科学省が取りまとめた報告書を参考として、障害者への対応に積極的に取り組んでいる博物館は多い(参考資料を参照)が、今後、各博物館において「ユニバーサル・ミュージアム」の推進に向けて、さらなる取組が進められることを期待したい。

## 委員からの提言

## 「ラベリングしない芸術」

本懇談会のテーマである障がい者アートについて、美術的視点、教育的視点、福祉的視点の3点から提言いたします。



社会福祉法人 素王会  
アトリエ インカーブ エグゼクティブディレクター  
今中博之

### ■ 美術的視点

過去には、障がい者が作った芸術ということを大きく唱い、社会参加運動や症例研究などとして障がいのある人による芸術が活用され、パラレル・ビジョン展(1993年・世田谷美術館)以降、アウトサイダー・アートという言葉が日本でも次第に認知されるようになりました。そして現在、この言葉の取扱いが難しくなっているように感じます。ひとつには歴史的観点から、ジャン・デュビュッフェがアール・ブリュット＝生の芸術を提唱した時代、つまり第二次世界大戦前後と現代では、文化や文明の時代性が齟齬を起こしています。(下記参考資料)例えば、テレビや新聞、携帯電話などが普及した今、文化的処女性を確保するのは至難の業でしょう。現代にアウトサイダー・アートという言葉を使うのであれば、定義そのものを見直す必要があると思われる。また、ヒューマンイズムの観点からは、障がいがある人＝社会的弱者とみられる人が創るものに対し、優劣の評価軸を設けにくいという声が美術関係者や一般鑑賞者から聞かれます。芸術というものは作家自身の社会的背景や位置づけではなく作品そのものの芸術性を問われるべきです。彼らは、「障がい者アート」や「アウトサイダー・アート」という枠組みを軽々と超える創造性を持っています。彼らの作品はまさに現代美術です。だからこそ、現代美術を扱う既存の美術館の学芸員が芸術性の観点からのみ評価し、展示・收藏されることが自然であると考えます。「アウトサイダー・アート」と名打たれた作品だけを収集し展示する美術館を建てることは、芸術をラベリングするという点で、観客の自由を奪っているように思えます。

2011年夏には、アトリエインカーブ(以下:インカーブ)のアーティストたちの展覧会が、ニューヨークのジャパン・ソサエティで開催されます。展覧会を企画するジャパン・ソサエティのギャラリー・ディレクターであるジョー・アール氏(元ボストン美術館アジア・オセアニア・アフリカ美術部長)は、こう言われました。「インカーブのアーティストの作品は、アウトサイダー・アートではなく、現代美術として扱われるべきである。」日本の文化をアメリカで発信し日米交流を図るジャパン・ソサエティにおいて、この展覧会が開催されることは、日本の美術界にとっても画期的な出来事となるでしょう。

(参考資料:美術手帖2008年4月号小出由紀子氏によるアール・ブリュットの解説より抜粋)

「…デュビュッフェは(中略)美術教育とは無縁の人々が、文化とはほど遠い場所で、その人にしかわからない動機から自発的につくるものこそ真の創造だとし、その芸術的価値を確信した。さらに「胃弱の人の芸術や膝痛持ちの人の芸術が存在しないように、狂人の芸術などというものは存在しない」と断言し、芸術を狂気や病から切り離れた。